

### 附属の今 附属聴覚特別支援学校

附属聴覚特別支援学校 副校長 今井二郎

5月22日、盲啞児の教育を始めようとする古川正雄らは楽善会を結成し、訓盲事業を相談した。そして彼らは、前島密らも会友に加えて東京府知事に設立をはたらきかけ、12年12月、外人疎開地であった東京築地の海軍用地に訓盲院の建物を完成させた。翌13年2月に盲生2名、6月には啞生2名が入学して教育が開始された。本校の創立記念日は、いつの日からか、楽善会が結成された明治8年5月22日としている。「学校授業開始」より5年も早いのである。

明治22年、手狭になった校舎の移転が認可され、東京小石川区指ヶ谷町の旧薬草試植園跡に校舎、寄宿舎が建てられ、24年11月に皇后陛下をお迎えして新校舎落成開校式が開かれた。その後、戦争で焼かれるまでの指ヶ谷校舎では、グラハム・ベルやヘレン・ケラーを迎えるなど日本の聾教育をリードしていた。

第2次大戦中の昭和19年、学童は戦災を避けるため埼玉県下の3カ所の寺に集団疎開した。指ヶ谷校舎は空襲で全焼し、昭和22年千葉県市川市国府台の旧軍施設が新しい校舎となった。江戸川を望む緑多い高台で、東京医科歯科大学、和洋女子大学など文教地区でもある。校舎となった「旧兵舎」は、現在でも中学部高等部生徒会の文集の名前となって残っている。

その後、昭和32年から校舎改築が学部ごとに進み、42年に全校舎施設が完成して、現在の学部毎の配置となったのである。完成に10年もかかったが、学部毎の工事だったことは、子どもたちにとっては学部卒業毎に校舎を移動して気持ちの切り替えになり、よい効果をもたらしていると思うのである。

平成16年4月、大学は国立大学法人となり、附属学校も文部科学省の管理から離れ、校舎改修が困難になった。しかし、本校は、その直前までに全校舎の改修が終わり、全教室に冷暖房が入って快適な環境の中で約270名の幼児児童生徒が元気に勉強している。



附属聴覚特別支援学校(国府台)



東京聾啞学校(指ヶ谷)

附属の今

### 研究紹介

附属学校教育局 准教授 熊谷恵子

### 通常学校における特別支援体制や支援方法に関する全国への発信

私は、これまで公的に支援されることがなかった通常学級にいる「発達障害」のある子どもたちに資するべく研究を行っております。

特殊教育の時代には、特殊教育諸学校や特殊学級などの区別された場で障害のある子どもの支援が行われていました。しかし、実は、通常学級の中にも、発達障害をはじめとするその他の障害、病気のある子どもたち、障害や病気がなくても支援を必要とする子どもたちがたくさんいました。2007年、特別支援教育がはじまり、通常学校・通常学級の中で、それらの1人1人の子どものニーズに応えるようにするシステムが整ってきました。特別支援教育コーディネーターを指名する、特別支援教育のための校内委員会を設置するなど、文部科学省が通常学校の中で、これらの子どもたちを支援するためのガイドラインを2004年に示しています。しかし、このシステムは動き出したばかりで、地域の中で、学校の中で、学級の中で、どのように人を配置し、効率よく、1人1人の子どもを実際に支援していくのか、その辺が大きな課題となっています。

筑波大学の、いわゆる普通附属学校においても発達障害のある子ども、他にも支援を必要としている子どもは少なくありません。そのために、公立学校で行っているようなシステムよりもさらに効率のよい新しいシステムを、全国に先がけて提案していくことが重要ではないかと思っています。

また、知的水準が平均より高い子どもたちの障害特性や学校・生活上の問題そのものも、まだよくは調べられていないような気がします。たとえば、アスペルガー障害を含む高機能広汎性発達障害の子どもたちは、①対人関係、②コミュニケーション、③こだわりの3つ組の障害といわれていますが、知的水準が平均より高いと、対人関係の問題はそれほど問題にはならず、それよりも忘れ物がある、提出物が出ない、遅刻をするなど、一見3つ組の障害とは関係のないようなことが目立ちます。このような子どもたちに対してはセルフマネジメントを身につけさせることが重要ですが、それをするのは至難の業です。学校にはどのようなシステムが必要で、どのようなツールを使い、どう支援するか、まだまだわからないことがたくさんあります。

fMRI(機能的磁気共鳴画像装置)などでこれまでわからなかった発達障害の脳機能研究も進んで来つつありますが、子どもが多くの時間を過ごす学校の中での学習・行動・生活に関する研究やその支援に関する研究は非常に重要な点であると思ひ、「教育」ということにこだわってこれからも研究をしていきたいと思っています。

研究紹介

### この指とまれ 新人教員奮闘中

附属坂戸高等学校三年 演劇部リーダー 元井千晶

### 「交流の輪」

私たち筑波大学附属坂戸高等学校演劇部は、課外活動として地域のボランティアに積極的に参加しています。

先日5月9日。私たち演劇部は、同じくボランティアに参加している本学の生活人間科学系列・福祉モデルの「しゅわっち」と呼ばれる「歌を手話で表現する」グループと坂戸市石井にある第二福祉作業所のお祭りに参加しました。

坂戸市には福祉作業所が2カ所あり、数年前に指定管理者制度が導入されました。今回の作業所祭りは新しい制度になって初めてのお祭りだそうで、越生や鶴ヶ島の作業所と一緒に参加させて頂きました。野外に設けられたステージで、演劇部は関東大会で上演した劇のワンシーンとダンスを行い、「しゅわっち」は175Rというバンドグループの『空に唄えば』を手話で表現しました。また、最後に演劇部と「しゅわっち」でコラボレーションダンスを踊り、パフォーマンスは大成功に終わりました。



その後、「しゅわっち」は模擬店などで障害者の方々と一緒に飲み物やクッキーの販売を手伝い、演劇部も地域の方々との交流をしました。フィナーレでは司会を務め、参加者全員で輪になってダンスをし、とても盛大なお祭りとなりました。当日は400人近いお客様がいらっしやっただそうです。

後日、学校には第二福祉作業所の方々からお礼として手作りのお菓子や感謝のお手紙が届き、改めて私たちは地域の方々との交流の素晴らしさを感じ、今後このような場が増え、筑坂生がより参加できるといいと思いました。また演劇部は12月には福祉作業所のクリスマス会にボランティア公演する予定です。



### 新人教員 奮闘中

### 「初心に返って」

「英語の授業は英語で」という方針が新しい高校の指導要領に盛り込まれ、広く関心を集めている。誤解されている面もあるが、とにかく英語で授業を行うことが大変であるのは間違いない。それを昔から実行してきたというだけでも附属高校はかけがえのない学校である。その末席にこの4月から加えていただくことになった。晴れがましくうれしいと同時に、責任も大きい。附属高校にふさわしい授業が自分にできるのだろうか、という思いがつかまとう。今までに他校で積んだ経験は通用しないであろう。そこで初心に返ることにした。教員になったこと自体が初めてという新人のつもりになったのである。これは客観的には真実でなく、若さで生徒をひきつけることは到底できない年齢に達しているのだから自分で自分をだましていたようなものだが、気持ちは少し楽になった。新米なのだから、最初から理想的な授業ができなくても驚くことはなく、日々の積み重ねでよい授業作りを学んでいけばよいことになる。振り返って試行錯誤の連続である。鋭敏な生徒から満足な反応を引き出すことは容易でない。掲載した写真の授業で、黒板にグラフらしきものがあるが、

附属高等学校 教諭 河野雅昭



英語で生徒と問答する助けにしている。拙い試みであるが私なりの工夫の一端であり、とにかく授業を成功させようという努力がそのまま教師としての勉強になる日々である。直接・間接に教をいただいている諸先輩方に感謝しつつ、ますます精進してゆきたい。

